

医者たちの 8月15日



大阪府保険医協会=編

医者たちの8月15日

1987年8月15日 初版第1刷発行

編 著 大阪府保険医協会
(編集代表 小松良夫)

発行者 面 屋 龍 延

発行所 清風堂書店出版部

〒530 大阪市北区曽根崎2-11-16
TEL 06 (316) 1460
FAX 06 (314) 3635
振替大阪4-5733

印刷・三晃社／製本・立花製本株式会社

ISBN4-915339-24-6 C0036 ¥1400E



医者たちの8月15日

大阪府保険医協会=編

はじめに

なんのための戦友会誕生か

敗戦後、一部の元参謀などが戦記物を出版し、なかにはその印税で大儲けをして政界にのり出したような厚かましい者もいたが、多くの戦争体験者は沈黙を守った。ところが今から十年ほど前から、少し別の風潮が見られるようになった。財界や同業組合などに旧軍隊の戦友会が続々と結成され、お医者さんの間にも軍医の会ができた。さらに奇妙なことには政界にまで戦友会が生まれ、その会合では与野党議員の区別なく、戦闘帽をかぶり、肩を組んで高歌放吟をするというすでに人生の終末に近づいた時、彼個人にとってはかけがえのない青春時代が、たとえ運わるく戦争という特別な時であったにせよ、今の若者のそれよりも著しくつまらない時間であったとは誰しも思いたくない気持ちから出たものであろうが、どうもそれだけではないようだ。

非戦の語り部を継承する

本書の内容は太平洋戦争中各方面における軍医としての従軍記録やソ連を含めた戦時捕虜時代の苦心談、戦中、終戦時の外地からの引きあげの模様、戦災地にはじめて地域医療を展開した時

の苦労話、困難であった当時の学生ライフなど、「大阪保険医雑誌」に一九七四年から一九八六年までの毎年八月の終戦記念特集号「私の戦後史」の一部である。

今あらためて通読して感じることは、投稿された各位のそれぞれの人生において、あの数年間に凝縮された記憶がいかに鮮烈かつ広範囲を占めているか、多数の人々があれ以後の俺の人生は付けたし。と書いていられるのを読んで感慨をあらたにせざるを得ない。

近年、とみに平和をおびやかす悪風の顕著ななか、非戦の語り部の事業はさらに想をあらたにして継承して行かねばならないと思う。

軍医の立場で臨場感あふれる

そういううちにも武井、広井両副理事長を失った。広井国男元軍医の手記によると、彼は旧陸軍第一四師団野戦病院付で、昭和十九（一九四四）年四月からパラオ本島に配属され、アンガウル、ペリリュー等の諸島に分散配置されている隷下の諸部隊を巡回診療してまわった。時速九ノットの大発で前記二島へ行ったのが昭和十九年の七月。孤立無援の守備隊員は軍医の来訪を泣いて迎えたという。彼がパラオに帰ったのが八月、アンガウルもペリリューもその九月には米軍が上陸、守備隊は玉砕した。そんな強運の彼を平和時の病魔がまだまだ多くの時間を残して奪ったのである。

吉岡観八元海軍軍医もまた昭和十八（一九四三）年、ニューギニアはフィンシハーフェン地区守備の陸戦隊付となって苦戦を味わい、遂に軍医ながら戦闘指揮をとりつつ、多数の傷病兵をウエワクまでつ

れ戻った。そのような豪勇とは見えない彼の温顔にも手記にも、ふたたび接することができなかった。多くの方々の戦記は軍医という立場からの臨場感あふれる文章で市販の戦記物などより迫力があった。

中村安治郎元府医会長は、あの十五年戦争の大半を軍医としてすごした。太平洋戦では陸軍第四師団野病配属、比島はバターン作戦に参加し、重油燃えさかるマニラ湾を泳いで、衛生隊のくせにコレヒドール要塞一番乗りをはたした。

中野信夫元保団連会長はビルマ方面軍第三一師団。後に国軍最悪の作戦といわれたインパール作戦のうちでも惨烈を極めたコヒマへ、最前線の軍医として従軍しあらゆる辛酸をなめつくした。(著作に「靖国街道」がある)

医者が伝えなければならないこと

戦後、医療の民主化や平和運動のリーダーとして情熱をそそぎ続ける人たちに、あの戦いにおいて二河白道を突破し万死に一生を拾った経験者が多い。その反面、元大本営参謀であったり、海軍経理学校から東京帝国大学へ出向研修生になったような旧軍エリートたちもまた、今なお財界政界を牛耳っている。戦後は遠くなり、若い医師も増え、戦争体験を語るに憚る雰囲気ではあっても、現実の社会はなおあの戦争を重く引きずっている。

医師という職能者は、戦争にあっても一種の社会的地位に据えられ、一定の役割を演じるものである。伝えられる悪魔の飽食族やその類のものは論外としても、戦時の特権階級であった

軍の上層部に伺候した元高級軍医さんもまだ健在だ。それが政財界のパーティーなどで、旧軍人としての連帯感から、「ねがいます」などと安直で粗雑な雰囲気の中かで、国民の福祉や医療の問題を語ってもらいたくなんぞはないものだ。あの戦いで払われた、累々たる犠牲に応える万分の一の責任感もない時代が続いている。戦争体験とはいっても、その事実がいかにように後世に伝えられるか、それが問題なのである。

（大阪府保険医協会雑誌部副部長 辻 一省）

もくじ ● 医者たちの八月十五日

はじめに	3
------	---

プロローグ 一週間のいのち	15
---------------	----

第一章 戦場の医者たち	19
◻ 外地篇	

伝染病棟の不寝番	23
----------	----

満鉄の病院列車	26
---------	----

生き恥からの転身	31
----------	----

侵略地帯にコレラ菌	35
-----------	----

パラオのジュタン爆撃	38
------------	----

パターン「死の行進」に想う	43
---------------	----

巻尺で測った頸の太さ	46
------------	----

スコップ一本で	48
---------	----

漂流した七日間	病院船撃沈	49
地獄絵図		50
青春のブラックホール		51
ビルマ戦線での顕微鏡の活躍		53
生と死の分かれ目	ラングーン	57
靖国街道	自爆の続出	63
	インパール	
○・一ミリグラムのアトロピン		68
南十字星下の敗走	ニューギニア	69
ニイタカヤマノボレ	真珠湾	79
関東軍特別大演習		83
戦場の医者たち	内地篇	87
屍のなかを歩く		88
人生観をかえさせた若き日の思い出		93

終戦時の青酸カリ……………96

食べ盛りの潜入騒動……………98

京都の空をこがす大阪大空襲……………100

幻の野田藤咲きぬ……………102

八か月間の拘置所ぐらし……………104

日米両軍に焼かれた家……………107

第二章 医者たちの八月十五日……………111

ピカドンから不死鳥のように……………112

無医村に疎開して……………114

光華院釈俊哲童子「うまうま……」の一言をのこして……………116

神武百二工場の班長として……………121

八月十五日―敗戦の日 神風……………123

若かりし日のレジスタンス……………126

第三章 抑留・復員

ただ一人の卒業式	134
空襲と誤診の谷間で	136
人力車で往診に	138
二転三転	140
ターチョ(大車)と四人の侍	142
関東軍の終焉	145
桑島恕一君の遺書	147
抑留・復員	151
母よ、あなたは強かった	155
報恩	158
復員船で働いたこと	161
三十万開拓農民の悲劇	165
ペチカで暖めた屍体	168

見棄てられた民草……………171

望郷を夢みた収容所……………174

ハバロフスク捕虜将校収容所……………176

二歳の子を救った中国人医師……………178

第四章 廃墟のなかから……………183

たった半日だけ通学した新制高校……………186

かぼちゃとコンビーフ……………189

敗戦の夢さめて……………192

なんとか医師に……………195

国破れて山河あり……………197

廃墟のなかで開業する……………200

住民の診療そして政治の道……………203

ペニシリן一本が米一俵……………207

開業のころ 210

医学と心の支えを求めて 213

焼跡にむなしい教師の訓話 216

七農三医 218

長崎被爆・学友を焼かれて 220

広島可悲劇を繰り返させまいと 223

第五章 十五年戦争と軍医 227

なぜいま戦争体験なのか——昭和医療史から 228

エピローグ 医者たちはいま何を語るべきか 242

あとがき 246

「プロローグ」 一週間のいのち

片山利貞

昭和二十（一九四五）年八月六日、広島に原爆が投下された。これを新聞記事では、「広島に特殊爆弾が落された」と表現していた。

このころ、私は大阪帝国大学医学部四年生であったが、講義はほとんどおこなわれず、第二外科応援学生とされていて、死亡診断書の書くことのできない医局員生活を送っていた。他に放射線科教室研究学生でもあった。

原爆のニュースを聞いた時、ふと放射線科研究室に置き忘れられていた「子供の科学」なる雑誌の記事を思い出した。そこには半ページ程の紙面に、「原子爆弾」という見出しで、簡単に原爆の原理が書いてあった。これを読んだ時、まさか今次大戦に使用されるとは思わなかった。

原爆患者については、政府から何も教えられなかったが、翌七日午前中に早くも患者が来院しはじめた。

私の診た患者は、三十五歳ぐらいの中肉色黒の婦人であったが、なかなかの美人であった。患者は誰れにどう教えられたか知らないが、梅田駅から焼け野原の道を通って、まっすぐに阪大病院にきた由であった。患者は汽車で、広島から大阪を通して、どこか田舎の知人を頼って行く途中だが、疲れがひどいのと、手足の火傷のために立ち寄ったらしかった。